

平成五年二月二十八日 (日) 郷土研究会資料

第一九八回 史跡めぐり

岩槻市大戸・末田 越谷市三野宮・野島

越谷市郷土研究会

第一九八回 史跡めぐり案内

日時 平成五年二月二十八日 (日)

集合 越谷駅東口前 午前九時一〇分

(東武バス岩槻行、九時三〇分乗車)

行先 大戸第六天神社、末田金剛院、三野宮一乘院、野島浄山寺

コース

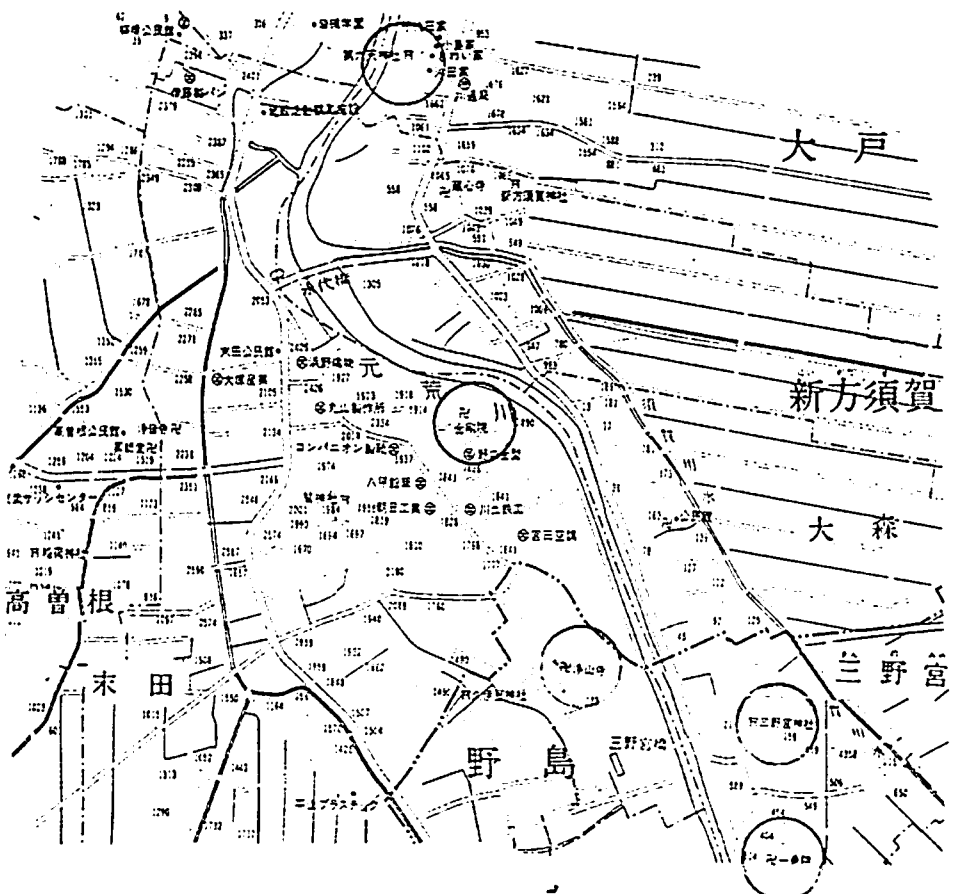
越谷駅→大戸バス停→大戸堰→第六天神社→大戸堰→金剛院→一乘院(昼食)→浄山寺→野島バス停→越谷駅

参加費 一、三〇〇円(交通費・資料代・その他含む)

案内者 理事 鈴木 秀俊

主催 越谷市郷土研究会

(史跡めぐり地図)



【大戸の堰】（岩槻市大字大戸・新方須賀）

正式名称は、末田・須賀堰枠。熊谷付近から鴻巣・葛蒲・白岡・蓮田を通り、岩槻市のほぼ東部を流れる元荒川の水は、岩槻の最終点ともいうべきこの堰でせき止められ、川幅を拡げて造られた溜井に入る。ここから水路を通じて供給される水は、岩槻市東南部をはじめ越谷市西北部の広い水田を灌漑する。

『新編武蔵風土記稿』に、

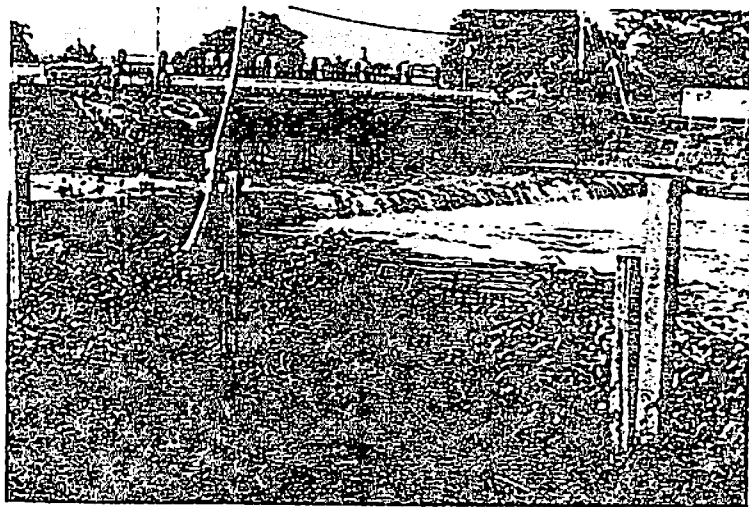
一 元荒川ノ西当村（須賀のこと）ト末田村トノ界ヲ流ル兩村ニテ石堰ヲ造リ水ノ増減ニヨリテ差引ヲナシ越谷辺二十三ヶ村ノ用水トナス土人シメ切堰ト称ス又此水ヲ堰下流ヨリ分水シテ村内ノ溜井ヘ引入此溜井岩槻領二十三ヶ村ノ用水トナルサレハ四十六ヶ村組合ナレトモ末田村ト当村ノ持一

とあり、この堰で下流域への流量調節が行われ、末田・須賀両村が維持していたことが知れる。

もともと農業用水の管理を目的に造られた堰であったが、次第に両村を結ぶ交通路（橋）としての機能が期待されるに至り、明治以降改修が行われたが、十分なものではなかった。

大正十五年、村の主だった人々の尽力により、鉄筋コンクリートの永代橋が完成し、堰は具管理の下に置かれた。

現在、堰枠の近代化、自動化の改修工事が進行中で、新永代橋もようやく開通した。



大戸の堰

【第六天神社】（岩槻市大字大戸）

越谷から元荒川沿いに行くと、満々と水を湛える溜井を背にした、武蔵第六天の一といわれるこの社の前に着く。創建は天明二年（一七八二）六月十五日、面足命ほか七神を祭る。昔から火災・盗難・疫病を除去し、五穀

豊穰の靈験あらたかとして、近隣はもとより江戸界隈にも崇敬者が多かったという。今も近県各地から訪れる参詣者は少なくない。祭礼は七月十五日。

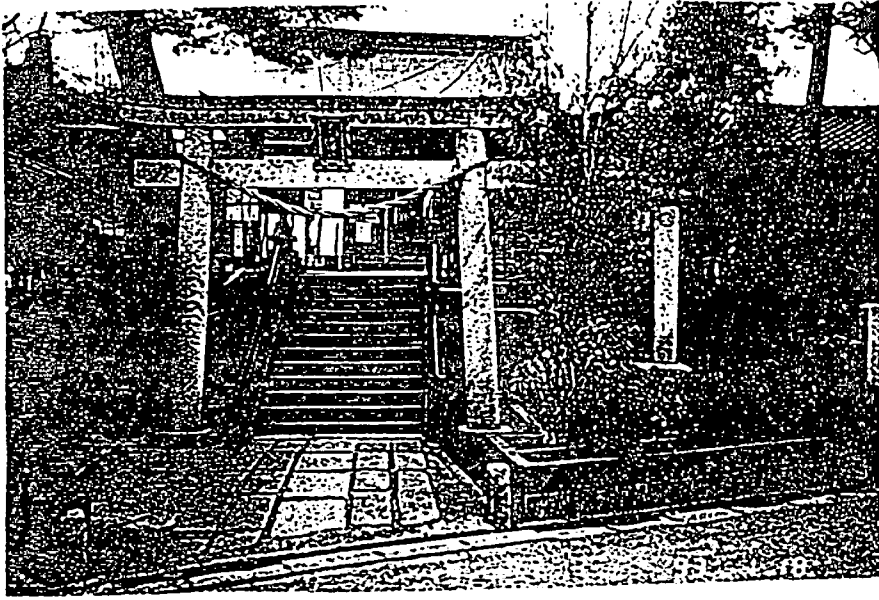
この神社の青天狗・赤天狗の絵馬は有名で、境内の大樹に宿る大天狗・小天狗が参詣者に神徳を授けた古事によるという。祭神と天狗とのつながりはよくわからないが、交通地獄と受験戦争たけなわの折から、この絵馬はなかなか好評であるとか。神徳をいただいた絵馬は、翌年の春には元の社前に返納されるならわしになっている。

大字大戸は農村地帯であるが、神社付近には昔から講中宿の小さな門前町が形成されていた。今は川魚料理の店が多い。

【金剛院】（岩槻市大字末田）

真言宗豊山派の寺院で、奈良長谷寺の末寺。号を金龍山妙音寺という。幕府から寺領十石を受ける御朱印寺であった。

宥慶上人による開山当時は、古義真言宗で岩槻にあって金剛



（第六天神社）



金剛院の仁王像

坊と称していたが、寛正三年（一四六二）この地に移転したと伝えられている。

『新編武威風土記稿』に「仁和寺末寺ニシテ談林所ナリ」とあることから、この寺はかつて御室派学僧の修業場であったことが知れる。山門は別名仁王門と呼ばれ、元禄十年（一六九七）桂昌院（將軍綱吉の生母）の寄進によるもの。山門とともに市文化財に指定されている左右の金剛力士（仁王）像は、江戸時代前期の作といわれ、奇木造りで、極めてリアルなタッチで彫り上げられている。

#### 【一乗院】（越谷市大字三野宮）

新義真言宗の寺院で、足立郡倉田村明星院の末寺、稲荷山と号し本尊は阿弥陀如来を祀る。

創建は鎌倉時代、三ノ宮村が風早村といわれていた頃に、鎌倉の將軍頼朝公の大姉政子によると伝えられる。

本堂の建具類のうち、板戸や欄間などは市指定歴史資料文化財である。

境内入り口にある田口久五郎の墓は、明治二三年八月水害の騒擾で犠牲となった田口警察官を悼んで、明治二四年三月、警察官や有志の人達により造立されたものである。

※三ノ宮卯之助：江戸時代の末、三野宮の出身で日本一の力持ちといわれた。現在、香取じんじゃには卯之助が奉納した力石が残されている。

卯之助は力持ちを見世物として一座を組織し、諸国を巡業した。深川八幡、鎌倉八幡、信州の諏訪神社など

に、卯之助の名を刻んだ力石が奉納されている。

卯之助の生まれた向佐家に位牌があり、表に「到殺清に土 嘉永七寅年七月八日 不二位」、裏には「日本市大力持三ノ宮卯之助四十八歳」と書かれている。

【浄山寺】（越谷市大字野島）

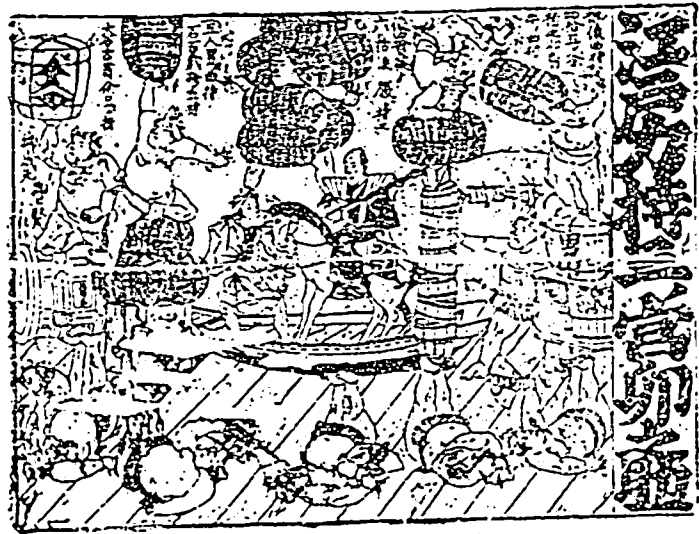
新篇武蔵風土記稿に「浄山寺 禅宗曹洞派、足立郡里村法性寺末、野島山と号す。当寺は貞観二年慈覚大師の建立にて、本尊延命地蔵の立像長さ四尺余、則ち大師の作なりと伝え言う。天正年中迄天台宗にて慈福寺と号し、時の住僧を明山と言う。この頃里村法性寺四世震龍当寺に勤学せしが、東照宮越ヶ谷辺御放鷹の時、本尊靈験を聞き召され寺領三石の御朱印賜わり、この地霊にして山鬱密として浄し、と上意ありて今の寺号を命ぜらるると言う。

また、僧震龍御帰依あるをもて明山の後住となし、曹洞派に改め中興とす。今、本尊を片目地蔵と唱う、信仰するもの多し一とある。

◇ 片目地蔵伝説

浄山寺に安置されている本尊地蔵大菩薩は、今からおよそ千四百年前平安時代の貞観二年、天台宗の高僧慈覚大師円仁の作である。

大師がかって日光山に登って中禅寺を開こうとされたとき、たまたま降雨はげしく途中の河川は水が溢れ、渡船自由ならず、河岸に二昼夜滞在され水の引くのを待たれた。丁度スモモの熟する季節だったので、大師もこれ



三ノ宮卯之助の興行広告

を食べ、その種子の一つをもって日光山に登った。大師はこの種子を「この種子の落ちた所を靈地と定め給え」と御仏に念じて大空に投げ、一宇造営の願をかけられた。

それから八年、諸国を遍歴して辿りついたのが武州崎西郡太田の庄岩附の地であった。折からスモモの花盛りの頃だったので、大師は「これは私が八年前に大空へ向かって投げたスモモの種によるものであろう」と思われ、その地に一宇のお堂を創建された。これが現在の華林山慈恩寺である。

大師は更に、そのスモモの木を伐って三尊の仏像を彫刻した。即ち、根元で観音、中木で地藏尊、うら木で薬師の三体を作り、観音は慈恩寺に、地藏尊は慈福寺に、薬師は慈林寺に安置された。依って三寺は大師の頭字を寺号に冠し、共に大師の開基である。

時は流れて桜町天皇の元文六年（寛保元年・一七四一年）の頃であった。地藏尊は僧侶に姿を変えられて毎朝早く錫杖を打ち振りながら民家の前に立たれ、布施受語をもって人々を教化されていたが、ある時逆縁に触れて茶園で慈眼を傷つけられ、血が涙にまじって流れ出したので、門前の池の水で目を洗った。

それからというものは、この池に棲んでいた魚も虫も皆片目になったという。その後誰いうとなく、この地藏菩薩を片目地藏と名付け、今でもその仮名で呼んでいる。野島の地に茶の木を栽培しないのも、その靈験ありたためである。

〈註〉地藏尊の遊化については、これに先立つ事柄があります。

後光明天皇の承応二年（一六五三）住僧四代州室和尚の頃であった。地藏尊の首に釘を打ち鉄の鎖で繋いだので遊化されなくなった。けれども現報逃れ難く、和尚は業病にかかって孕したという。その後中御門天皇の享保十一年（一七一六）九代日厳和尚は、お開帳の折り背中の釘や鎖を見るに忍びず抜き取られた。

#### 参考文献

岩槻・城と町まちな歴史

聚海書林

越谷市の史跡と伝説

越谷市教育委員会

新篇武蔵風土記稿

林 述斎

越谷の歴史物語①

越谷市役所

編集 鈴木 秀俊

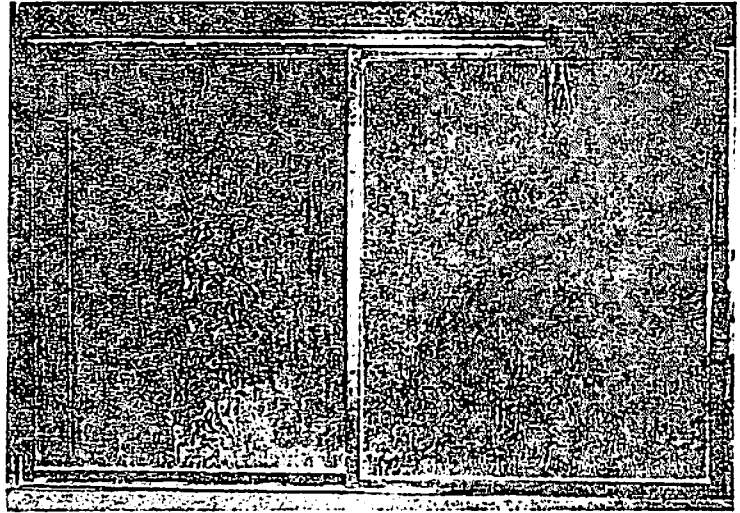
# 一乗院の建具

市指定・歴史資料

昭和59年9月27日指定

●越谷市三野宮618（一乗院）

三野宮一乗院本堂の建具類のうち、板戸や欄間などは、慶長15年(1610)徳川家康造営になる神奈川御殿の解体資材である。この御殿の解体資材は、元禄10年(1697)5代将軍綱吉の生母桂昌院が、真言宗鳴の金剛院(現岩槻市末田)に一封の仁王像とともに寄進されたものである。その後一乗院は幕末期に火災で全焼したが、その再建にあたり金剛院がこの資材を一乗院に寄付した。越谷ならびにその周辺では数少ない江戸初期の建具として、また明暦3年(1657)の江戸大火で江戸城二の丸に移された越ヶ谷御殿の当時の建具がしのばれるものとして貴重な歴史資料といえる。



# 浄山寺の朱印状

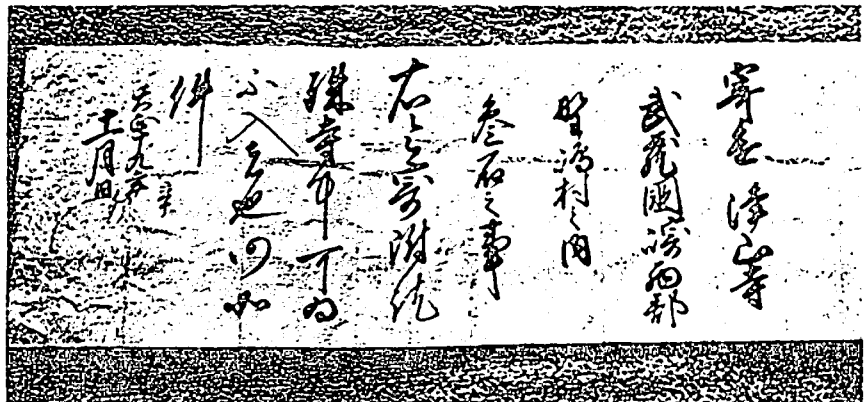
市指定・古文書

昭和47年10月25日指定

●越谷市野島32（浄山寺）

天正18年(1590)関東に入国した徳川氏は、それまで寺社や地侍層が私有していた領内の人民や土地をすべて収公した。このうち主な寺社にはその代りとして、翌19年11月、検地のうえ改めて寺社領を寄進した。この徳川氏による寺社領安堵の寄進状を朱印状と称される。このうち曹洞宗野島浄山寺には、寺伝によると高300石が付与されたが、浄山寺ではこれを過分として辞退した。家康はこれを受けて懐中より鼻紙をとり出し高3石と認めて浄山寺に手渡したという。そこでこの家康の朱印状をとくに「鼻紙朱印状」と呼んでいる。これに

は「武蔵国埼玉郡野島村之内三石之事」とあり、当時当地域は埼玉郡と称されていたのが知れる。これが埼玉郡と記されるようになったのは寛文5年(1665)の家綱朱印状からである。





# 野島浄山寺の大鰐口

市指定・工芸品

昭和42年1月11日指定

●越谷市野島32（浄山寺）

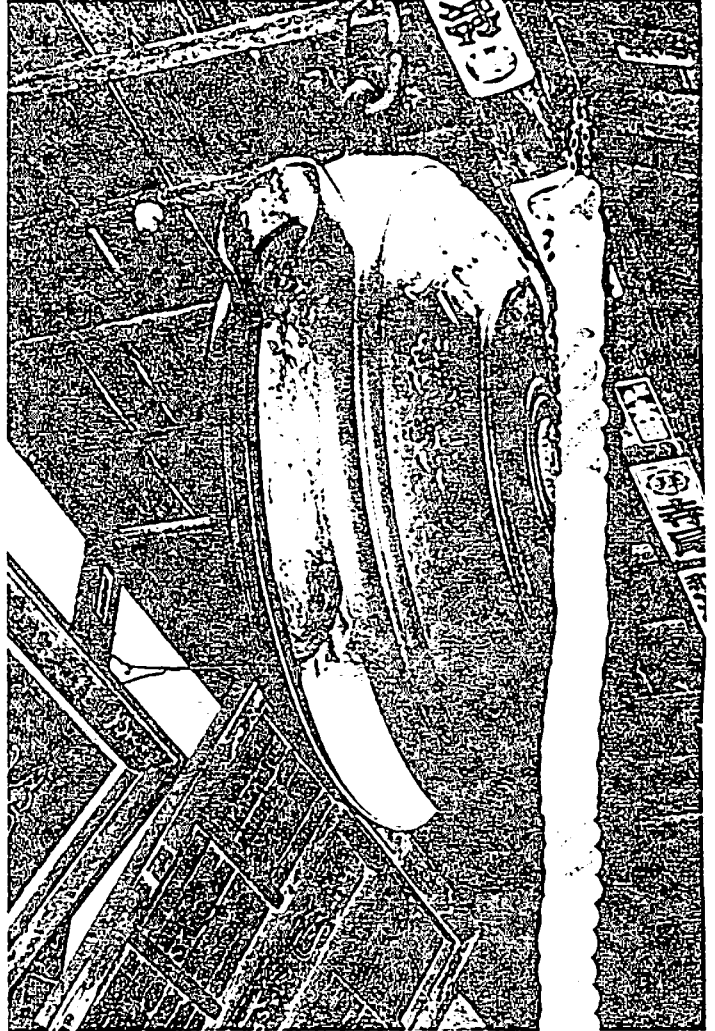
鰐口とは、社殿・仏堂前の軒下につるす金属製の祈禱に用いられる鳴物具。その形はまるく平らで、その中は鰐の口のような空洞となっており、布で纏んだ綱で打ち鳴らされるものである。

浄山寺の大鰐口は、天保12年(1841)に奉納された銅製のもので、直径6尺(176cm)、厚さ2尺(60cm)、重量200貫(750kg)という全国でも稀にみる大きさである。

この大鰐口の表面には銘が刻まれており、表側にはこの鰐口の奉納者の氏名が80名ほど刻まれている。奉納者を見ると、神田紺屋町・本小田原町・日本橋青物町・神田豊島町・馬喰町二丁目・江戸橋四日市・芝金杉浜町・大伝馬町・深川冬木町・千住河原町・二郷半領花和田村・竹塚栗原町・柏壁・高野・大門・菖蒲など広範な地域にわたっている。当時浄山寺では、湯島天神や千住慈眼寺の出開帳、熊谷・深谷・太田などへの巡回出開帳を行っており、人びとの信仰を集めていたが、この鰐口はこうした人びとの浄財によって造られたことが、この奉納者銘から知られる。

また裏側には、奉納のいきさつが刻まれており、要約すると以下のとおりである。

「この鰐口は、江戸四谷全勝寺二十世全達和尚が国家安穏五穀豊饒を祈って発願したが、不幸中途にて他界したため、当山二十一世珉宗和尚その鹿頭をみるにしのびず、一般信男信女より浄財を得て、天保十二年二月その願望をとげた」



「越谷市の文化財」より抜粋